

書 評

キャロリン・G・ハイルブラン著 大社淑子訳

『ハムレットの母親』

別 府 恵 子

本書の著者キャロリン・ハイルブランは、フェミニスト批評の先駆者としていまさら紹介の必要もないほど、『両性具有の認知へ向けて』(*Toward a Recognition of Androgyny*, 1973年)、『女の伝記を書く』(*Writing a Woman's Life*, 1980年)などの著作で知られる英文学者。さらに、ペンネームをアマンダ・クロスとする推理小説作家としても知られるコロンビア大学文学部教授で、32年の長い年月英文学を講義して、1992年に同大学を早期退職した文学研究者である。¹⁾ 昨年3月に邦訳が出た原書 *Hamlet's Mother* は1990年に出版され、表題にもある「ハムレットの母親の性格」(1957年)を除いては、著者が1972年から1988年までに発表した論文を収録したハイルブラン最初の論文集である。

邦訳が出版された直後の昨年の春、NHK テレビの「週刊ブックレビュー」で同書が書評対象図書に取り上げられていたのを思い出す。こうした学術書がテレビの「書評」番組で紹介されることにいささか驚きながら番組の「合評コーナー」を聞いたのである。推薦者は作家であり、フェミニストとして活躍する落合恵子。その他の評者はたしか俳優で翻訳も手掛ける岸田今日子、あとひとり是谁だったか忘れたが男性評者、そして番組の司会者の児玉清だったと記憶する。ところが、期待に反してというか予想どおりというか、『ハムレットの母親』の受容は芳しくなかったのである。使用されている言語が耳慣れない言葉

であるというのが二人の男性評者の共通した反応であった。もちろん、翻訳書であるための訳語が問題だというのではない。いわゆる、思考形態そのもの、言説が「耳慣れない」、すなわち難解だというのだった。そうした反響はとくに日本においてだけの現象ではない。フェミニズムが浸透しているとされるアメリカの文学界（会）でも、フェミニスト批評にたいしては同様のことがささやかれる。そうだとすれば、少し「耳慣れない」言説にも耳を傾けてもよいのではないだろうか。以下、紙面の許すかぎり『ハムレットの母親』の内容を簡単に紹介しながら、評者の意見を述べたい。

本書はテーマ別に5部に分けられた21編の論文から構成された論文集である。「はしがき」を寄せているナンシー・ミラーは『ハムレットの母親』を「女性の人生の将来を語る、刺激的な散文で書かれたフェミニスト論の驚くべきタペストリー」(xvi)と形容する。それは著者ハイルブランの人生と文学に寄せる関心の多様性を表すかのように、複雑な多色彩で織りあげられたタペストリー。ギリシャ神話から、ソフォクレス、ホーマー、シェイクスピア、フロイト、ヴァージニア・ウルフ、ルイザ・メイ・オルコット、メイ・サートン、近代英国小説、フェミニズム批評、風俗推理小説といった文学／文芸論、そして大学制度の政治学や教授法、結婚、母と娘、女の友情、老い、探偵という学会や文学研究を越境した多様な話題を議論の俎上にのせる。

第一部には「ハムレットの母親の性格」一点だけが収められているが、それはハイルブランが望みをかけて発表した最初の出版物（『シェイクスピア・クォーターリー』、1957年）であり、著者の文学者としてのスタンスを確立した論文として、本書を飾るに相応しい巻頭論文。ハイルブランを「時代に先んじている人」とミラーは紹介するが、1957年といえば、ケイト・ミレットの『性の政治学』（1970年）を十年以上、ジュディス・フェタリーの『抵抗する読者』（1977年）を二十年も先んじている。おそらくシェイクスピアを「女として読む＝批評する」最初の論文といってよい。著者は女を意思の弱い、愚かな動物的存在として定義することになった、ハムレットが母親ガートルードに放った台

詞「弱き者よ、汝の名は女なり」を問題にする。すなわち、ここでいう「弱き者」とは「情欲」の虜になったひとりの王妃（女）を指示するだけ。この一つの弱点があたかもガートルードの全人格を表すと解釈されてきたことに反論を唱えたのである。それもブラッドリー、グランヴィル＝パーカー、ドゥヴァー・ウィルスンといった当時名を馳せたシェイクスピア学者たちへの挑戦状だった。確かにガートルードは夫の死後日を待たずにクロードiasと「近親相姦的結婚」をしたが、それは彼女が情欲に負けただけの話、結婚生活／性生活を続けたかったからにすぎない、とハイルブランは言う。この欠点を除けば、ガートルードは常に現実を直視し、問題の要点を明確に指摘できる知的な女性だと、入念なテキストの読みを論証に反論する。そして、気が狂って溺死したオフィーリアへのやさしさを決して忘れなかった女性だと。「ガートルードは、好色かもしれないが、知的で洞察力があり、簡潔できびきびした話し方をするすばらしい才能に恵まれている」（25）というのだ。

ハムレットの母親に着せられた汚名を晴らそうとするハイルブランの論評もまた「簡潔できびきびした」弁論だ。現代の批評用語を援用すれば、ある年齢（45歳）をすぎた女性のセクシュアリティ（性欲）を異常なもの汚らわしいものとするエリザベス朝、そして歴史を通してのジェンダー論議へと展開する。それは女たちが「誤解され不当に非難されているという」ハイルブランの痛恨の思いが堰をきって吐露されたものとも読めるが、「ハムレットの母親の性格」は1997年のいまなお斬新な論文である。ハイルブランの学者としての名誉のためにも、フェミニスト批評の名誉のためにも、彼女の論評は正確なテキストの読みに裏付けされたものであることを断っておかねばならない。

第二部は「模範的女性」と題され、マーガレット・ミード、「フロイトの娘たち」、ヴェラ・ブリテン、ウィニフレッド・ホルトビー、ヴァージニア・ウルフをめぐる6編の論文から構成されている。ここでは、ミード、アンナ・フロイト、ヴァージニア・ウルフに関する論文に触れたい。『女の伝記を書く』にも明らかに、「時代に先んじている」ハイルブランの関心は、「過去における

女性の自立の伝統と影響を探ることにある」。したがって彼女にとって「模範的女性」とはそうした先駆者たち——マーガレット・ミードであり、「フロイトの娘たち」で取り上げられるアンナ・フロイトなどである。だが、「模範的女性」たちの人生を探る＝伝記を書くことは、「不安と両義性^{アンビヴァレンス}に満ちた、問題のある領域に入ることでもある」(31)と警告する。すなわち、女たちがそのあり方、考え方のモデルを見つけようとするとき、過去の「模範的女性」が完全な自立を拒否されているか、さもなければ「成功」の代償として無視あるいは報復されるかのシナリオしかないからだと言う。なぜなら、私たちの受けた教育と私たちを取り巻く一般文化は女性を理解するよりは男性を理解することにより大きな重点を置いているからだとベル・ゲイル・チェヴィニーを引用して、そうした状況で女性の生涯を研究し、伝記を書くことは至難な仕事だと、ベティ・フリーダンのミード評を提示する(35)。著者は女性の書く女性の伝記に顕著にみられる女性の自立に関して女たちが味わう「両義性と不安」のメカニズムを詳細に分析する。

上にみるように、女にとって人生の選択は「成熟の結果として」の母親放棄と、「退行による」母親との一体化、すなわちフロイトの「家族ロマンス」のパラダイムである。「フロイトの娘たち」、いわゆる「男性的」生を生きたとされるアンナ・フロイトやポーの伝記作家として知られるマリー・ボナパルト、マーガレット・フラーなどもまた、フロイトの「男性」「女性」の定義を疑わず、彼の性差別にあえて挑戦しなかった(46-47)。『アンナ・フロイト』の作者ヤング＝ブリュールは、偉大な父と一体化できたアンナは、「男性的だ」と思われる生涯を送った後でもなお、避けがたい「女性的な」役割についてのフロイトの定義を主張したと記す。ハイルブランは、そのヤング＝ブリュールを「フロイトを受け入れた」女たちの生涯を再読する機会を提供したと評価する(43)。

一方、生涯を精神分析に捧げた「フロイトの娘たち」のうちひとりカレン・ホーナ伊だけがフロイトの女性観に挑戦したという。ホーナ伊の伝記作家スーザン・クインは内部からの批判者になって、女性の性欲に関するフロイトの意

見に反論を企てたが、その試みはフロイトによって抹殺されたとハイルブランは指摘する(48)。家父長制のなかでの「父と娘」の関係はまだ新しい論点。昨年の夏、「偉大な」父と娘の自立の関係を模索する書、森茉莉とアナイス・ニンを併置して論述する『「父の娘」たち』(矢川澄子著)が出版されたが、この分野はまだ未開拓の領域だ。それほどにフロイトの「男性性」「女性性」二分法は文化の諸位相に深く浸透している。その呪縛からハイルブランも完全には解放されてはいない。

本書が初出となった、ジョイス生誕百年記念出版物のために執筆された「ヴァージニア・ウルフとジェイムズ・ジョイス——アリアドネと迷路」(1982年)は、本書に収録されたもののなかでも量、質ともに秀逸の論文だ。二十世紀最大の作家とされるジョイスを向こうにまわして、ハイルブランは彼の同世代の芸術家としてのヴァージニア・ウルフ再評価を試みる。その議論は古代世界の遺跡の発掘、考古学にもおよび、二人の仕事の違いを見事に裁断する。ジョイスが「古代宇宙論の世界に留まって、ますます魔術的に、ますますダイダロスの技能と手腕を使って旧生活の迷路と通路をたどったのにたいして、ウルフはアリアドネを探し」、男性的言説から忘れられたアリアドネ(女)の「神話と女性の可能性の世界」に入っていた(107-8)と。これほど明快に、二つの優れた知性——ジョイスとウルフ——を対比・評価した論考を評者は知らない。学部学生時代にはじめてウルフの『自分だけの部屋』(1929年)を読み、その作品を愛読した評者にはハイルブランのウルフ論は胸のすく知的ゲームだ。さらに、ハイルブランの論評にはいつもその対象への人間的なまなざしがある。「50代のヴァージニア・ウルフ」においても同様、人間としての老い／成熟と芸術家としての熟成を50代のウルフの作品に著者は発見する。「結局、彼女は衰えて消え去ったわけではない。50代でまったく新しいことを為したのだった——女としての怒りに形をあたえ、過去について語る新しい方法を見いだした——」(143)と論述する。

第三部は「文学と女性」として、「ペーネロペーがほどこいていたのはなに

か？」に始まる文学論、そしてウルフ、オルコット、現代アメリカ作家メイ・サートンを論じた6つの章からなっている。神話のなかの貞節な妻として有名なペーネロペー。ハイルブランはなぜペーネロペーが、昼間織った経帷子を夜になるとほどいたのか、と問いかける。彼女が毎夜その日に織ったものをほどくのは仕事を遅らせるためだけでなく、新しい物語を織る／書くためだと言う。すなわち、他の織り手たちとちがって、彼女が書こうとしたのは「男の暴力の物語」＝戦争の物語でなく、「女の自由選択の物語」。それにはなんのプロットもなかったため、織ってはほどくという過程の繰返しをしていたのだと説明する。女の物語は「結婚のプロット」、「求愛のプロット」であって、男の物語にある「探索のプロット」はない(159)。それが次の「結婚の認識——英文学 1873-1944」の論議に発展する。すなわち、英文学に描かれている「結婚」——結婚と密接に関係する「金、階級、財産、性」を絡めての「結婚プロット」——談議。ジェーン・オースティン、ジョージ・エリオット、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・メレディス、トマス・ハーディ、ウルフ、E. M. フォースター、D. H. ロレンス、ヘンリー・ジェイムズなどなど、その対象は広範囲にわたる。面白いことに、文学に描かれた結婚のなかで、対等者でないが、仲間同士の結びつきといえる唯一の例として、ホームズとワトソンの関係をあげ、探偵小説におけるワトソンの原型的な必要性は注目されてきたが、「彼のホームズにあたえる家庭的慰安」＝伴侶としてのワトソンに気づいた注釈者はいない(179)とのハイルブランの指摘は時代を先取りする「結婚の認識」である。ウルフに関する論文とともに優れた論文だ。

「女性と文学」に収録された最後の二編は、孤高の作家として最近その存在と評価の高いメイ・サートンに関する論文。1960年代から70年代のフェミニズムがゾラ・ニール・ハーストンなど多くの女性作家たちを「発見」したように、時代に先んじたハイルブランによってメイ・サートンというアウトサイダー的アメリカ文学者が発見されたといえよう。ハイルブランは「芸術家の生活と、人生の芸術化にたいする関心」の二点を、サートンはほかの近代作家——ジョ

イス、ウルフ——と共有すると主張する。サートンの小説『ミセス・スティーヴンズは人魚の歌を聞く』の邦訳もすでに出版されているが、サートンの本質はその回想記にあるとするのがハイルブランの論旨。というのも、現代文学の特徴として「各ジャンルの融合」があげられるが、この点においてサートンは並外れているという。「多くのジャンルのあいだを移動し、時折り人生からの同じ供物をいくつかの明確な芸術のかたちに蒸溜しながら、彼女はジャンルの境界線を守ってきた」(239)と断言するハイルブランの文芸評論家としての見識と技量を評者は強調したい。

第四部、「文学という職業とフェミニズム」には、英文学教授、大学人として、学会という組織のなかで仕事をし、生活するハイルブランの随想、提言、近代言語学会(MLA)の会長としての講演録などが集められている。どれも、同じ大学人、文学研究者として読んで啓発されるもの、同志の弁として勇気を与える提言(「英文学研究に生氣を取り戻す」や「文学部におけるフェミニスト批評」)であり、また警告である。ハイルブランと彼女の教師でありコロンビア大学での同僚でもあったライオネル・トリリングとの確執に評者は学問的／職業的スリルを読み取るのだ。

最終の第五部は「推理小説」と題され、「風俗推理小説」論、「ジェンダーと推理小説」、セイヤーズをめぐる断章など興味深い論文が並べられている。先述のとおりアマンダ・クロスとして推理小説を出版しているハイルブランだからこそ、純文学と大衆文学を同列において論じることができるのであろう。最近ではル・ギンなど優れた(女性)推理作家が活躍する。ダンテの「神曲」の翻訳者でもあるドロシー・セイヤーズが、またJ. C. オーツがロザモンド・スミスの仮名で推理小説を発表している文学状況を考えると、「ジェンダーと推理小説」というテーマは、評者が現在関わっている課題でもあるという偶然も重なって、第五部を楽しくかつ有益な「付録」として読んだのである。

原註、索引を含め430頁の大書『ハムレットの母親』に収録の論文すべてを公平に紹介できないのが残念だが、全編を通じて著者の広く多岐にわたる関心

は、ミラーの言うようにまさに「フェミニズム論の驚くべきタペストリー」である。惜しいことに、冒頭で触れた「週刊ブックレビュー」での反応が示唆するように、そのタペストリーが織り出す意匠がまだ一般的になじみにくいという現状だ。シェイクスピアの『冬物語』でハーマイオニが身に覚えのない不義の嫌疑をかけられ、レオンティーズに自己弁護する場面での王妃の悲壮な叫び——「殿下の話される言葉は私には分かりません」——がまた聞こえてくる。いつ、同じ言語で女と男は対話し、討議するのだろう。ただ、ハイルブランのフェミニスト批評は、広く重厚な学識と長年の研鑽とに裏付けされたものであり、かつ人間的深い洞察に満ちたものであることを追記しておく。

(みすず書房、1997年3月、本文396頁／原註・索引32頁、4,944円)

註

- 1) ハイルブランが32年間勤めたコロンビア大学を罷めるにいたった経緯を書いた記事が、『ザ・ニューヨーク・タイムズ・マガジン』の1992年11月号に掲載された。それによると、彼女の早期退職の裏にはいまだに男性が支配する大学の体質があるらしい。過去6年間に3度、ハイルブランが支持したフェミニストの女性学者はコロンビア大学の専任職を拒否され、ハイルブランと共に研究したいと希望する大学院生も博士課程に入学を許されなかったという事実が絡んでいるという。訳者「あとがき」(393)から。